

記憶論が宗教哲学にもたらすもの

——ルロワ＝グーランを中心に——

佐藤 啓介

記憶という主題をめぐっては、宗教哲学に限った場合、「誰についての」記憶かを分水嶺として、アイデンティティをめぐる自己論・共同体論と、歴史に回収しえない他者論との二つの議論が展開されることが多い。しかし、記憶という主題がもつ宗教哲学的なポテンシャルは、それだけには尽きないことを示すため、本研究では、ルロワ＝グーランの名著『動作と言葉』を参照し、記憶論のポテンシャルを引き出すを試みる。

彼は、人類はアウストラロピテクスからネアンデルタール人へと進化する過程において、人類が直立二足歩行を始めることで、手が解放されて道具を生み出すようになり、また、口が縮小し脳が発達することで言語を生み出したと考える。彼に特徴的なのは、そのプロセスを「解放」と「外部化」という観点で考えることである。人間は、身体を解放していき、身体的動作を外部化していくことで、ヒト化したのである。そして、解放と外部化というプロセスは、ネアンデルタール人以降も起こり、技術の発達とともに様々な身体的機能が解放され、道具へと外部化されていったと考えられた。しかし、ここで大きな問題が浮上する。アウストラロピテクスからネアンデルタール人までの間に、大脳皮質の進化が起こったのに対し、ネアンデルタール人と我々原生人類の間に、大脳皮質を含め、神経器官レベ

ルではほとんど違いがない。それなのに、両者の間でかくも技術の差があるのはなぜか。その答えの鍵となるのが「記憶」である。

ルロワ＝グーランは、記憶の働きを三つのレベルに区分する。第一のレベルは、自動的な刺激反応のように、あらゆる生物がそれぞれの種ごとに遺伝子レベルにおいて本能として有する記憶。第二のレベルは、経験と教育を通して個々人にプログラム化され、同じ行為を機械的に繰り返すことのできる可能性の根拠となる記憶。第三のレベルは、それぞれの民族・文化ごとに共有され、民族ごとの行動の類似性を生み出す基盤となる社会的記憶である。そして、大脳皮質の進化の結果、人間のみが、第二のレベルである個人的記憶を大量に保持することができる。第二レベルの記憶とは、日常のなかで特に意識せずに行われている初歩的な「機械的な動作連鎖」を指す。しかし、それらはあくまで個人のレベルで身についた習慣でしかなく、遺伝しない。従って、そのままでは、種としての人類は、技術や文化を発展させることができない。ルロワ＝グーランによれば、その発展が可能になったのは、人間が「記憶を外部化」したからである。そして、その記憶の外部化を可能ならしめるのが、特定の動作連鎖が反映された技術の産物である物質、なのである。ステイグレルの言葉を借りれば、技術が記憶を補助する、というよりは、「技術それ自体が記憶」なのである。もちろん、記憶の第三のレベル、民族的記憶もまた、こうした記憶の外部化によって生じる。同じ道具、同じ言語、同じ表象を共有することでおのずから共有される動作の「様式」が、民族

的記憶に該当する。技術ならびに物質は記憶の媒体であるにもかかわらず、それが各個人において動作として継承されると、その記憶の起源は忘却され、生得的に可能であったかのようにみなされるという差延的構造に置かれている。

ルロワ・グーランの議論は、物質世界を生きる私たちが、その身ぶりの一つ一つに、物質的技術という外部記憶を通して、過去の人間からの記憶、すなわち動作連鎖を継承していることを教える。その意味において、倫理的ではない仕方において、私たちは死者たちの記憶と交流している、あるいは、死者たちの記憶を生きていると言える。そうした考察は、自己が自己以外のものによって構成されている可能性を問う試みでもあり、その意味において、宗教哲学の課題たりうるのである。

ゲオルグ・カントルの神学

落合 仁 司

ルネ・デカルトに端を発する近代幾何学はユークリッド空間 R^n に代表される無限の空間を対象として来た。さらに近代幾何学は無限の空間の大域的な性質を対象とするに及んで、ユークリッド空間 R^n と無限空間であることにおいて同一であるにもかかわらず、自らの限界を有することにおいて差異化される球面 S^n や射影空間 P^n を発見して来た。この限界を有する無限空間という日常言語から見れば端的な論理矛盾と言う他はない空間の存在を始めて証明したのが他ならぬゲオルグ・カントルであ

る。

デカルトは完全な無限、カントルは現実的無限、アリストテレス・トマス流に言えば完結した無限を、神の述語と考えていた。完結した無限、それこそ限界を有する無限の他ではない。すなわち近代幾何学の対象である限界を有する無限は神の述語なのである。ここに神の述語として近代幾何学の観念あるいは理念を援用する数理神学、幾何神学、位相幾何神学が成立する。

そもそもデカルトが自らの思考、見ることに於いて「自らが思考している」ことと同等あるいはそれ以上に明証的すなわち見えるとしたのは完全な無限したがって限界を有する無限を述語とする神であった。デカルトにとってコギト以上に明証的であるのは幾何学の理念を述語とする神の他には考えられなかったのである。さらにカントルと同門のエドムント・フッサールが現象学的還元の結果に明証的であると直観した志向の対象は限界を有する無限という幾何学の理念の他ではありえなかった。デカルトのコギトもフッサールの志向もまず何よりも限界を有する無限という幾何学の理念、神の述語をその対象としているのである。

限界を有する無限とは、現代幾何学の中心に位置する位相幾何学の言葉に言い換えれば、位相空間分けでもコンパクト位相空間である。位相空間は自らの部分集合の無限和が存在するという意味において無限であり、その無限和（限界であることが証明される）それ自体もまた自らの部分集合であるという意味において可能的・潜在的に限界を有する。この可能的・潜在的な限界が自らの（外部ではなく）内部あるいは境界に存在する